

秋田日本語教育研究会 & 国際教養大学専門職大学院（日本語教育実践領域）共催



2017 年度春学期 日本語教育特別研究会

（ワークショップ® & 講演会）

講師： 田口直子 先生（カーネギーメロン大学）

佐藤慎司 先生（プリンストン大学）

日時： 2017 年 7 月 2 日（日）13:00 - 17:00（12:30 開場）

場所： 国際教養大学（D101・102 教室）

大学 URL: <http://web.aiu.ac.jp/>

使用言語：日本語

プログラム

13:00 - 13:10	開会
13:10 - 14:30	田口先生ワークショップ 「スピーチスタイルとスタイルシフト：上級日本語クラスでの指導法の一例」
	休憩
14:40 - 16:10	佐藤先生講演会 & ディスカッション 「未来を創ることばの教育をめざして：ことばの教育と平和、思いやり、リスペクト」
	休憩
16:20 - 16:50	懇談会
16:50 - 17:00	閉会
18:00 - 20:00	情報交換会（秋田市中心部にて）

参加費：無料

参加ご希望の方は、6 月 30 日（金）午後 5 時までに本学教務課教務チームまでお電話、FAX、Eメールのいずれかにてお知らせください（事前の申し込みがなくても参加できます）。

TEL: 018-886-5930 FAX: 018-886-5910

Email: academicaffairs@gl.aiu.ac.jp

講師紹介とワークショップ・講演要旨

田口直子 先生



カーネギーメロン大学(現代言語学部)教授。専門は第二言語習得論と語用論。北アリゾナ大学で博士号取得。ミネソタ州立大学機構、国際教養大学等で英語教育に携わり、2005年からカーネギーメロン大学に移り第二言語習得論及び日本語教育で教鞭をとる。

主な著書に『Pragmatic competence in Japanese as a second/foreign language』『Second language pragmatics』『Developing interactional competence in a Japanese study abroad context』等がある。

「スピーチスタイルとスタイルシフト: 上級日本語クラスでの指導法の一例」

日本語には丁寧体(です・ます体)と普通体の二つのスピーチスタイルがある。一般的に普通体はくだけた会話で使われ、丁寧体は改まった場面で年齢や社会的立場が違う相手との会話で使うものとされている。しかしスピーチスタイルは必ずしも場に固定されたものではなく、同じ場面でも談話の展開、話し手の態度や心的距離、話題の共有化の変化によって両スタイルが混合する場合が多い。スピーチスタイルという言葉の「形式」(form)を使って、変容するコミュニケーションの「場」(context)に適切なスピーチスタイルをもって対応し実生活で「機能」(function)する力は、日本語コミュニケーション能力の必須部分であると考えられる。ゆえに、スピーチスタイルの実態を提示し、そのコミュニケーションの効果を日本語学習者に考えさせ、意識化を促すことは日本語教育において大切な項目の一つであるといえよう。このワークショップでは、複雑さゆえ指導が難しいとされるスピーチスタイルの指導法について、実際の教材例を見ながら検討する。また通常のクラスでどのようにスピーチスタイルを取り扱うことができるか、アイデアを出し合って考えたい。

佐藤慎司 先生



プリンストン大学東アジア学部上級講師・日本語プログラムディレクター。専門は日本語教育。コロンビア大学で博士号取得。ハーバード大学、コロンビア大学等で教鞭をとり、2011年より現職。

主な著書に『日本語で社会とつながろう: 社会参加をめざす日本語教育の活動集』『未来を創ることばの教育をめざして: 批判的内容重視の言語教育の理論と実践』『文化、ことば、教育: 日本の教育の「標準」を超えて』等がある。

「未来を創ることばの教育をめざして: ことばの教育と平和、思いやり、リスペクト」

現在世界では以前にも増してさまざまな様々な集団の摩擦・対立問題が起こっています。アメリカ・ヨーロッパにおいては、移民、難民問題とそれに関連し極右政権が台頭してきており、日本でもヘイトスピーチに代表されるような暴力的な運動が起きています。このような時代において、誤解、摩擦、対立、戦争を避けるためには、ことばの教育には何ができるのでしょうか。

本講演では、言語学習を生態学視点(van Lier 2004)からとらえ、ことば、(学習者の)アイデンティティ、コミュニティ・社会がお互いに影響を与えあい常に変化しているという点に注目をしている関連理論を概観します。その後、それらの理論を踏まえ、教育へのデザインを行なっている『市民性形成をめざすことばの教育(細川、尾辻、& マリオッティ 2016)』、『社会参加をめざす日本語教育(佐藤&熊谷 2011)』を紹介したいと思います。最後に、日本語・日本文化といったようなある学習言語・学習文化を習いはするが、それだけにとられすぎない、「多言語・多文化」に開かれた日本語教育といったものがどのように可能なのか、筆者の行った実践例をいくつか見てみることで、みなさんといっしょに考えていきたいと思っています。